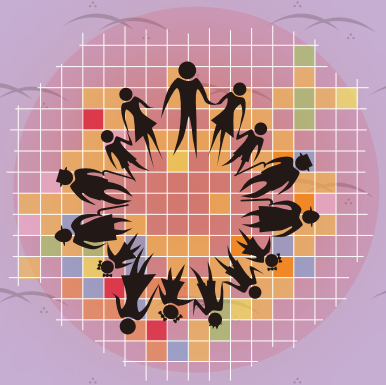
■主催：公益財団法人 花王 芸術・科学財団
http://www.kao-foundation.or.jp/

公開シンポジウム
「これからの家族を考える」
シリーズ第３回

かわる家族 かわらぬ家族



公益財団法人 花王 芸術・科学財団

公開シンポジウム
「これからの家族を考える」
シリーズ第３回

2018年11月20日（火）18:00〜20:00

日本橋三井ホール
（東京都中央区日本橋室町 2-2-1　COREDO 室町1　5F）

主催　公益財団法人 花王芸術・科学財団

かわる家族 かわらぬ家族

目次

プロローグ（p2〜p4）
「改めて家族を考える」
東京大学名誉教授　原島 博

基調講演（p5〜p15）
「家（いえ）から連（れん）へ」
法政大学総長・江戸文化研究者　田中 優子

パネルトーク（p16〜p24）
田中 優子 × 橋谷 能理子 × 原島 博（コーディネーター）

プロローグ

「改めて家族を考える」

東京大学名誉教授
原島 博

■「家族」というテーマは非常に難しい

この３回シリーズのシンポジウムコーディネーターをしております原島でございます。まずは、こんなに多くの方々にお集まりいただきまして、御礼を申し上げます。最初に、プロローグという形で話をさせていただきます。

このシンポジウムは 2016 年に始まり、今回で３回目になります。全体のテーマは「これからの家族を考える」。これについては５年くらい前から事務局と一緒に考えてきましたが、花王は家族を大切にしているというイメージが非常に強い会社ではないかということで、このテーマにいたしました。

ところが、このテーマを設定した後、実はかなり悩みました。若干、反省もしました。なにしろ難しいテーマです。おそらくみなさんの家族というものに対するイメージはそれぞれ違うのではないでしょうか。年代によっても違うでしょうし、男性から見た家族、女性から見た家族も違うのではないかと思います。

このシンポジウムを企画したとき、なぜ難しいのかと思い、いろいろな方に聞いて回ったところ、２つの意見に分かれました。ひとつは、「家族は自分にとってしがらみである」。考えてみれば、その通りですよね。自分がどの家族に生まれるかは選べません。結婚相手は選べても、選んでしまったら、普通はそう簡単には別れられません。すると、しがらみになってしまう。一方で、「やっぱり一人では寂しい、一人では生きていけない、絆は大切だ」という意見もありました。家族はしがらみであるし、絆であるという意見にはっきり分かれたことから、１回目は、「しがらみときずな」というタイトルにいたしました。

そこでは、『岸辺のアルバム』など、いろいろな家族をテーマにしたドラマを作っておられる脚本家・小説家の山田太一先生に、「宿命としての家族」という演題でお話しいただきました。人は、それぞれ違います。人がそれぞれ違っていていいように、家族も違っていていいのではないか。理想の家族というものは実在しないのではないか。家族の中で、それぞれの生き方が問われているのではないか。家族は絆だと言われていますが、単なる依存関係では成り立たないのではないか。そういうお話だったと思います。特に山田先生は、歳を取ると自立することが大切なのだと、かなり強調しておられました。

理想的な家族は実在しないとはいえ、家族は最大の関心事です。その家族はいつからあるのだろう、家族のルーツにさかのぼって考えてみようと思い、２回目のタイトルを「進化しているのか家族」といたしました。そして、京都大学総長で、ゴリラの専門家である山極寿一先生に、「人間家族の由来と未来―ゴリラから AI まで」という演題でお話いただきました。

山極先生が最初に、家族は人間社会だけの営みだとおっしゃったのには驚きました。よく、おしどり夫婦などと言いますので、おしどりにも家族はあるのかと思っていましたが、単に子育てをするだけではなく、死ぬまで一緒にいるのは人間だけだそうです。では、なぜ人間には家族があるのか。人類はアフリカのサバンナという猛獣に襲われる危険があり食物も簡単に手に入らない厳しい環境で、互いに助け合うという戦略によって生き延びてきました。子育てに関しては、チンパンジーやオランウータンの母親が子どもに５年から７年くらい乳を与え続けるのに対し、人間は１年で離乳します。それは厳しい環境の中でたくさん子どもを産む必要があるためですが、子どもが育っていないのに離乳できるのは、子育てを母親だけがするのではなく、まわりと助け合う仕組みがあるからです。それが人間の重要なところなのですが、今は、子育てが母親だけのものになってしまいました。父親はなかなか家に帰ってこず、隣の家は全然知らない人。保育園まかせで、互いの助け合いがなくなってしまった。現在はインターネット社会ですが、ネットでは助け合うことはなかなかできません。助け合うためには「共感力」が必要で、共感力は、いちばん基本となる最小単位の家族で育まれるというお話でした。

■イメージを変え続ける家族

３回目のタイトルは「かわる家族かわらぬ家族」ですが、正直に言うと、今日は結論が出るとは思っていません。むしろ、自分の問題としてみんなで考えていくためのヒントが得られればいいと思っております。思うに、わたしたちは家族を、「こういうものでなければいけない」と、かなり固定的に考えてきたのかもしれない。戦前の家族には、大家族で、家父長という威張っている人がいて、女性は厳しい環境に置かれてい

たというイメージがあります。それが戦後は、ほとんど核家族になりました。家には父親と母親と子どもだけがいて、おじいちゃんやおばあちゃんは田舎にいるような家族です。父親の帰りは遅く、残された母親が子育ての役割を負わされているイメージですね。こういう家族を、社会学では「近代家族」と呼ぶらしいです。

今は、こうしたイメージがさらに変わってきていますが、家族というのは歴史的に見ると、実はもっと自由だったのではないでしょうか。かといって、ゴリラまでさかのぼるのは行きすぎのような気もしますので、戦前よりもずっと前、たとえば江戸時代の家族はどうだったのかを考えてみようと思いました。そこで、ぼくが尊敬している田中優子先生、現在は法政大学の総長として、きわめて多忙なお身体でいらっしゃいますが、ぜひにとお願いいたしました。演題は「家から連へ」。「連」という言葉を初めてお聞きになる方もいらっしゃると思いますが、今日は家に帰ったら、江戸時代には「連」という素晴らしいものがあったということを、まわりの方に伝えていただければと思います。では田中先生、どうぞよろしくお願いいたします。

基調講演

「家から連へ」

法政大学総長・江戸文化研究者
田中 優子

「家族」より「家」が大事だった江戸時代

みなさま、こんばんは。さて、「家から連へ」ですが、「連」というのは何でしょう。これは家あるいは家族そのものではなく、コミュニティなんです。コミュニティというと、自治体や、数億人からなる国民のような大きなコミュニティを思い起こすかもしれませんが、家族のような小さいコミュニティもありうるんです。原島先生のお話にあったように、わたしたちは家族や家という概念や考え方に、がんじがらめになっているのではないか。家族を、コミュニケーションを取りながら人間関係をつなげていくコミュニティと考えることもできるのではないか。今日の話は、そういう提案だと思ってください。

江戸時代には「家族」ではなく「家」という言い方をしていました。そして、江戸時代の家では、夫婦は別姓でした。今、夫婦を同姓から別姓にする法律はなかなか通らず、夫婦別姓になると家族が壊れると言う方がいらっしゃいますが、世界には夫婦別姓の国がたくさんあります。東アジアでは中国も韓国も夫婦別姓で、ヨーロッパも今は、自由に選べるようになっています。日本は明治時代にドイツにならって夫婦同姓になりましたが、今やドイツも、夫婦別姓で構わないことになっています。ところが日本は、なかなかそうはなりません。夫婦別姓だと家族が壊れるのなら、世界の夫婦別姓の国では家族が壊れているはずですが、そうはなっていません。

一方、わたしたちが忘れていることがあります。それは、全員が「姓」や「氏」をもっていたわけではないということです。姓をもつ階級と、もたない階級がありました。時代劇や時代小説では姓がない人はあまり出てきませんが、それは、戸籍上は姓がなくても、適当に呼んでいたり、屋号で呼んでいたりする場合が多かったからです。武士を中心に、姓や氏をもっている家族では、夫婦別姓は当たり前のことでした。

また、夫婦は別姓であると同時に、別財産制でした。婿入りにしても嫁入りにしても、結婚するときに自分の財産をもって結婚し、結婚後も、それはずっと自分の財産です。たとえばお金もちの家の女性が嫁入りの際、高価な着物や家財道具などをたくさんもっていったとします。ところが結婚後、夫の事業がうまくいかなくなり、奥さんのもっている着物などを質屋でお金に換えてしまった。その場合、そのあとで夫が奥さんと離婚しようと思ったら、その分を返さなければなりませんでした。奥さんの財産だからです。このように、江戸時代は夫婦の別姓や別財産がきちんと守られていました。

明治５（1872）年に壬申戸籍が作られ、それまでの姓や氏が解消されて「苗字」になりました。「みんな苗字をもとう」ということで、その意味では平等になりました。これが、今の戸籍制度のもとになっています。その後、明治 31（1898）年に、ドイツにならって夫婦同姓が法律で定められます。こうして、夫婦単位の家族というものが、がっちりと法律で決まりました。

ところが、それまでの家父長制が崩れるという理由で、夫婦同姓に異論を唱える人もいました。つまり、夫婦別姓は家父長制とセットになっていたんですね。そこで明治政府はその異論を抑えるため、家父長と同じようで、しかし少し違うものを、戸籍の上で作りました。これが戸主で、ここで戸主権が成立します。戸主権には、家族のメンバーの住む場所を指定する権限、籍を外す、つまり勘当する権限、復籍の希望を拒絶する権限など、絶大な力がありました。この夫婦同姓と戸主権の２つが合わさり、明治時代の家族制度ができました。江戸時代に比べて、かなりガチガチの夫婦関係になった気がします。

そして、もうひとつ重要なことが起こりました。「家」から、「族」が一緒の「家族」になり、血縁という血のつながりが大事になったことです。そして、夫婦間に生まれた長男が家を継ぐ、つまり血のつながりのある家族で家を構成するのが当たり前になりました。もともと「家」というのは、必ずしも血族で構成されているわけではなく、家の中に血のつながりがない人がいるのはごく普通でした。たとえば、養子という言葉があります。養子にもらう婿だけでなく、本当に外部から他人を養子として迎えることは、今よりもずっと気楽に、普通に行なわれていました。なぜなら、「家族」ではなく「家」が大切だったからです。

■一種の企業体だった江戸時代の「家」

「家」は、一種の企業体だと思ってください。たとえば商家の場合、家＝会社ですから、あまり仕事が好きそうでない頼りない息子にまかせると、その家は潰れてしまうかもしれません。そこで、この息子は外に出し、まったく血のつながりのない他人を家の中に入れて家を存続させます。家にとっていちばん大事なのは存続で、存続を目的にすると、重要なのは血のつながりではなくて能力です。家は、一種の能力主義で成り立っていた組織だと言っていいと思います。ですから、娘に能力のあるお婿さんをもらうというのは、とても大事なことでした。

ひとつの事例を挙げると、江戸時代に小関三治郎という人がいました。この人は 17 歳のとき、伊能という家の５つ年上の女性と結婚し、婿入りをしました。そして伊能家を大きくします。伊能家は名主として地域で非常に重要な役割を果たすようになり、財産もできました。その後、この人は隠居をし、江戸に出て暦学を学び、やがて全国の測量をします。つまり伊能忠敬です。このように、家を大きくするというのは、ある企業体を大きくするということです。跡継ぎがいてもいなくても構いません。いなければ、外からもらえばいいわけですから。こんなふうにして、江戸時代の家は成り立っていました。

ひとつの企業体である家の中には、家族以外にもいろいろな人が出入りしていました。そして、商家などでは有能な番頭さんを養子、あるいは婿養子として迎え入れて家を大きくすることが、明治時代ぐらいまではよく行なわれていました。

そもそも日本の家族は通い婚が基本でした。源氏物語の世界のように、男性が女性のところに通い、女性は自分の実家で子どもを産み、実家の両親と一緒に子どもを育てるという形です。それが婿入りという形になり、婿入りが盛んに行なわれたあと、今度は嫁入りになっていき、そして明治時代に入るという順番になります。

これからの話をしますと、もし夫婦同姓から別姓になった場合、家父長的な家制度としての別姓ではなく、出生時につけられた個人の名前を出発点にすることが考えられるかもしれません。これはヨーロッパではもう始まっています。ヨーロッパでは、生まれたときの自分の名前をいちばん大事なものとしています。もちろん、のちに自分の意思で変えられますが、基本は出生時の名前なので、夫婦が同姓である必要はないという考え方ですし、法律でも認められています。

もうひとつありうるのは、戸籍がなくなることです。今の日本には戸籍制度がありますが、マイナンバー制度ができたとき、わたしはなぜ戸籍制度が必要なのか、首をかしげました。本来、戸籍制度は家族のためではなく、税金を徴収するためのものです。税金徴収

江戸時代の家（イエ）→近代家族へ

- 1872 年（明治 5）壬申戸籍によって姓と氏は解消され「苗字」となる。
- 夫婦別姓　→　1898 年（明治 31）夫婦同姓が法律で定められる。
- 夫婦同姓にともなって「戸主」が出現：戸主を「家父長」と位置づけ、戸籍をつくることとなった。家父長制度そのものはゆるがなかった。
- 「戸主権」は、家族の居住を指定する権限や離籍の権限、復籍を拒絶する権限などをもつ絶大なものだった。夫婦同姓はそのような条件を整えた上で成立したのである。戦後の「戸籍筆頭者」は「戸主」を言い換えて一夫婦単位としたが、戸籍と夫婦同姓は残存した。
- 「家」は必ずしも血縁で構成されてはいない能力主義組織であった。

→「家族」は血縁が基本となった。

→婿養子が盛んだった。小関三治郎（17）は伊能家に婿入りして伊能家を大きくし、名主となり、「隠居」して暦学を学び測量に携わった。

をマイナンバー制度に吸収するなら、戸籍制度は不要ですね。さらにマイナンバーを、出生証明や死亡証明、税金、年金、保険などを一括する個人の身分証明にしてしまうのであれば、これだけで済むわけです。戸籍制度がなくなると、家族は「個」が基本になります。日本では、初めてそうなるかもしれません。家族の中でも「個」が基本だとは現在も言われていますが、それでもまだ戸籍制度が存在し、戸籍筆頭者という名前で戸主の制度を受け継いでいます。

では、これからの家族とは何だろうと、わたしも時々考えます。家族がバラバラな個人となり、みんな孤独で生きるのでしょうか。現在のような高齢化の社会で、わたしも含めた多くの高齢者が、一人一人で住んでいくことが可能かどうか。そこで、家族を形成しない形として、まさにコミュニティ、その中でも「連」という可能性があるのではないかと考えています。江戸時代のように、血縁で構成されていない多様な個性が能力と役割を寄せ合うコミュニティも、ありうるわけです。そういうことを、考えてみようということなのです。

■江戸時代にはたくさんあった「家でないもの」

わたしたちは「個人」と「家」を対立的に考えてしまいます。家制度、あるいは家族制度の中で個人が生きていくのは息苦しい、まさに「しがらみ」と思ってしまう近代の考え方の中で、それから逃れたいという人も出てきて、それが個人を中心とした文学になって私小説などを生み出したという文化の歴史を、わたしたちはもっています。

江戸時代は「家」と「個人」の対立的な構図はなく、「家」と「家でないもの」という関係でした。「家でないもの」とは一体何でしょう。江戸時代は家元や農家、商家、武家など、すべて家制度で成り立っていました。幕府も家で、これは徳川家ですね。幕府以外の 270 ほどの藩も、各大名家も、すべて家です。「国の家」と書く国家は、江戸時代には概念としてはありますが、法律的には存在しません。全体をまとめているのは徳川家で、象徴的には天皇がいらっしゃいます。こうした家という制度を中心に、いろいろな家が「家連合」のように組み合わさって成り立っているのが江戸時代でした。けれども家にがんじがらめなのかというと、「家でないもの」もたくさんありました。それが連とか社、会、組、座、結、衆です。

結や衆というのは、いわば助け合いですね。結がいちばんわかりやすいでしょうか。たとえばある村で子どもが生まれたけれど、両親が亡くなって孤児になってしまう。すると、村の人々が結を組んでお金を出し合い、結の中でこの子を育てます。また、組については、どの村にも女性だけの娘組、若い男性だけの若衆組があり、村の男女の結婚の世話焼きなどで話し合いを行なったりしていました。江戸時代の村というのは単なる制度で、その中で組や座、衆や結などの小さい組織が、実質の村として機能していたんですね。

連や社、会というのは、村よりも都市の中にあったものだと思ってください。連はだいたい 10 人から 20 人くらいでしょうか、こうした江戸時代の小さな組織は、絶対に大きな組織にはなりません。その代わり、たとえばいくつもの連ができるんです。そして、お互いに顔がわかっている他人どうしが小さな組織に一緒にいることによって、さまざまなものを作り出します。

では、個人の側からは、こうした組織にどのようにつながっていたかというと、たとえば大田直次郎という幕臣がいました。下級武士ですが、幕府の役人です。跡取りでもあった大田さんの家での役割は、家を存続させるため、幕臣としての社会的地位を守って徳川家から給料をもらうことです。家ごとに給料が支給されていた江戸時代では、大田さんの給料は次の世代にも引き継がれていくからです。当時はこのように、幕府という大きな家と、大田さんの家のような小さな家が組み合わさっていたと思ってください。

でもこの人は、その役割だけで生きていたのではありません。実は文化人としても大変有名で、大田南畝（おおたなんぽ）という名前で盛んに物を書いていました。また、蜀山人（しょくさんじん）という、すごくおかしな狂歌を作る人としても有名でした。寝惚（ねぼけ）先生という名前で、狂詩というお笑いの漢詩も作っていました。これらはすべて家の役割ではなく家の外、「家でないもの」の役割で、大田南畝としては「会」のメンバー、蜀山人としては「連」、寝惚先生は「社」のメンバーです。こうして個人の中にたくさんの名前があり、自分の才能を会や連、社という場に投げ出し、それぞれのコミュニティをつくっています。こういう、一人の中に複数の人がいるという社会があって、江戸文化は成り立ちました。

たとえば、俳句は明治以降にできた言葉で、江戸時代は俳諧でした。本来は「滑稽」という意味です。ただ、松尾芭蕉の登場で俳諧は非常に権威のあるものになり、本来の滑稽な面が失われたことから、川柳や狂歌のように新しい笑いが作り出されていき、そこで出てきたのが狂名です。狂名とは狂歌の作者として用いる号で、つまりアバターです。狂歌作者たちはたくさんのアバターを作りました。その中に、先ほど例に挙げた大田直次郎も、

四方赤良（よものあから）という名で登場します。もう一人、酒上不埒（さけのうえのふらち）という人がいます。駿河の小島藩士の倉橋格という人で、倉橋寿平とも言います。彼は恋川春町という名前で小説を書いていました。武士が小説、しかもお笑いの小説を書いていたんです。絵入りの小説ですから、今でいえば漫画本ですね。さらに、尻焼猿人（しりやけのさるんど）という人がいます。この人は酒井抱一という画家です。しかも姫路藩主の弟で、酒井忠因（ただなお）という藩士でもありました。彼にはほかにも、屠龍（とりょう）、雨華庵（うげあん）という名前があります。武士以外では、湯屋を経営していた元木網（もとのもくあみ）という人がいます。奥さんもやはり狂歌や文芸をやっていて、知恵内子（ちえのないし）という名前をもっていました。五代目市川団十郎も、花道（はなみちの）つらねという狂名をもっていました。

五十首の狂歌が収められた『吾妻曲狂歌文庫』（あずまぶりきょうかぶんこ）は古今集のパロディですが、この書物には、こうした狂歌作者たちが、まるで百人一首の一人であるかのように登場しています。百人一首は平安時代のものですから、連では、みんながいわゆる“平安時代アバター”を自分の中に作ったんですね。このように、各自の才能を別々のグループの中で生かして物事を創造していくというのが、連の発想なんです。

■一人の人間には、さまざまな能力をもつたくさんの個人がいる

連のよくわかる事例のひとつに、連句があります。後に俳句になる発句というものがあり、発句は五・七・五です。そこにほかの人が、連想ゲームのように七・七の第二句の脇句を続ける。さらに別の人が五・七・五の第三句を続け、長いものでは100句になる場合もありますが、36句が連句の定型です。連句に参加する人たちを連衆と呼び、メモを取る人を執筆、さらにリーダーとして宗匠がいます。このリーダーはみんなを引っ張っていくのではなく、それぞれの個性を発見して生かす人です。

たとえば芭蕉のいる連歌の例に、次のようなものがあります。発句が野沢凡兆の「市中は物のにほひや夏の月」。脇句が芭蕉の「あつしあつしと門門の声」。発句は、夏の暑いときに市の雑踏の中に入っていくといろんな匂いがしてきて、その匂いを嗅いでいると月がのぼってきて涼やかになった、という句です。脇句では、町の門門で暑い暑いという声が聞こえてくると言っています。とても暑い盆地京都のワンシーンです。ところが、「あつしあつしと門門の声」が第三句の向井去来の「二番草取りも果たさず穂に出でて」と組み合わされるとどうでしょう。シーンは農村へと転換してしまいました。「暑い暑い」といっているのは農家の方たち、あるいは植物たちで、二番草を取らないうちに稲の穂が出てきた生命力が強調されました。「あつしあつしと門門の声」が、別々のシチュエーションで異なるシーンになったのです。

もうひとつ例を挙げましょう。最初が芭蕉の「苔ながら花に並ぶる手水鉢」、次は去来の「ひとり直りし今朝の腹立ち」です。朝起きた時にすごく機嫌が悪いという経験は、みなさんもありますよね。何かで腹が立って仕方ない。けれども、そのときにトイレに立ったら、手水鉢のところに花かと見紛うようなきれいな苔が見え、きれいだなあと思っているうちに腹立ちが収まってきた。芭蕉と去来の句からは、そんなストーリーが見えてきます。ところが、「ひとり直りし今朝の腹立ち」の次に凡兆の「いちどきに二日の物も食うて置き」がきたらどうでしょう。腹立ちが収まった理由は苔の美しさではなく、大ぐらいだったのですね。花より団子です。つまり連句とは、個人というものは絶対なものではなく前後の関係で変わってしまうものだということを、方法化した文芸なのです。

江戸時代には、こうした連がたくさんできます。その特質としては、適正規模を保つ、世話役はいるがリーダーはいない、常に何かを創造している、存続を目的としない、さまざまな人が集まっている、個人がたくさんの名前をもっている、というようなことが挙げられます。これが、江戸時代の個人というものの考え方です。人と同じにはならないけれど、人と無関係にはならない。大集団は組まないけれど、個々のつながりは大事にする。そういう場所に自由というものを発見していきました。

先日、今評判の『ホモ・デウス』を読んでいたら、とても興味深い内容が記載されていました。一人の中にたくさんの個人がいて、しかし、世間というものがあって、世間の中の自分はひとつなんだという意識をみんながもっている。だからこそ関係の中で協力し合って物を生み出していこうと、そういう内容でした。

江戸時代の人々について『ホモ・デウス』の言い方にならうと、「一人の人間の中にはさまざまな能力があり、それはそれぞれ別個のものとして名付け、取り出すことができる。そこに、『多名』ということが起こった」ということでしょうか。それぞれの能力が組み合わされることによって、新たな創造となりました。さまざまな連が関わって創造が行なわれるという状況が、江戸時代にはあったんですね。

連の特質

1 適正規模を保っている。
2 宗匠（世話役）はいるが強力なリーダーはいない。
3 金銭がかかわらない。
4 常に何かを創造している。
5 人や他のグループに開かれている。
6 多様で豊かな情報を受け取っている。
7 存続を目的としない。
8 人に同一化せず、人と無関係にもならない。
　→連句の精神
9 様々な年齢、性、階層、職業が混じっている。
10 多名である。個人のなかの複数のわたし。

浮世絵も、このような連の中で作られました。当初、浮世絵はカラーではなく、輪郭だけで描かれていました。ところが明和２（1765）年、どんな色でも印刷できる高度な印刷技術が登場し、浮世絵は突然カラーになります。このような技術開発があると、どこかの企業が行なったとか、大発明家がいたとか思われがちですが、実は連で開発されたものなんです。ある天才的な才能をもつ絵師を世の中に出すため、協力して本を作った連もあります。その絵師とは、喜多川歌麿です。当時の歌麿は美人画ではなく、昆虫や植物など、細かいものを描いていましたが、最高の印刷技術で本を作るというチャンスに恵まれたんですね。そのチャンスを、狂歌連が作りました。

■小さなコミュニティの活躍で、町の中に町ができた

江戸時代の町や村には、連以外の、ほかのコミュニティもありました。村を例に挙げると、村には必ず、名主とか庄屋、組頭、百姓代という３人のトップがいます。そして、この３人に物を言うのが、住民たちからなる寄合です。寄合は会議で決められた意見や要望などを３人のトップに伝え、３人のトップがそれを、藩の役人や幕府の代官に伝えます。これが村の自治組織です。江戸の町にも、奈良屋、樽屋、喜多村という３人の町年寄がいます。その下に町名主や家主がいて、彼らは住民たちの意思を町年寄たちに伝え、町年寄が幕府の奉行職に伝えるんですね。このように、住民たちが自治組織を作って、村や町を運営していました。つまりコミュニティです。このおもしろいところは、村長や町長のように「長」のつく人がいないことです。

また、江戸時代の家主は、たくさんの長屋を経営していました。現代のマンションのようなものですが、そこにはただ家族がいるだけではなく、いろいろな看板を掲げていました。職業紹介所の口入れ屋、顔で占いをする観相、あるいはお灸を据える人がいたり、祈祷師がいたり。つまり、長屋では仕事も行なわれていたということです。先ほど、江戸時代の家は企業体だと申しましたが、一人や二人の企業もあります。家族がいる場合もあれば、いない場合もありますが、「仕事をする場所＝家」の入れ物であったのが長屋なんです。四畳半ぐらいの狭さで、台所もついていて、外にトイレと井戸とゴミ入れがある。そのような場所で、仕事をしていたんですね。こうした、家族と仕事が分かれていない世界が、連のような働きをしています。

しかし、江戸時代の人たちが家族というものに無神経だったわけではありません。浮世絵には、親と子、特に母親と子どもが一緒にいる情景を描いた「母子図」がたくさんあります。多くは、働くお母さんと子どもです。江戸時代は女性が働くのが当たり前で、そういう社会の中で家が働く場所として機能し、同時に、お互いに働く同僚として家族が一緒

にいます。家族が同僚でもあるところに、わたしは連の可能性があるのではないかと考えています。江戸時代の商家の風景を描いた絵を見ると、家族で働いていることがよくわかります。学校である寺子屋も、家族で運営していました。

寺子屋といえば、今日のテーマからは外れますが、寺子屋の絵もたくさん残っています。そして多くの寺子屋の絵に見られる共通点は、学級崩壊していることです。まず、子どもは絶対に先生のほうを見ていません。机は好きなところに置いてあり、みんな遊んでいます。勉強はバラバラに行なわれ、先生はそれぞれの子どもに別々の教科書を渡し、課題を与え、添削します。途中で子どもたちが騒ぎ出しても、そのまんまです。「静かにしなさい」なんて、絶対に言わなかっただろうと思うんですね。

わたしは教育現場にいますが、たとえば今日のシンポジウムのように、全員が同じ方向を向いているというのは、とても不思議な気がしてしまいます。明治以降、学校は、全員が先生のほうを向いて同じことを教わるスタイルになります。でもそれが学校の絶対の姿ではないということが、寺子屋の絵を見るとわかります。みんなで同じ勉強をするのは効率的で、多くの人が教育を受けられるという利点はありますが、個人に合った教育を受けることはなくなっていくわけですね。話を戻しますと、こうした寺子屋も「家」が経営しているわけです。

連や社、会というコミュニティが動いている江戸っ子の世界では、江戸という大きな都市の中に芝居町という小さな町ができ、遊郭という土地ができ、ファッション界や出版界が出現し、そこに多彩なコンテンツが生まれました。カラー浮世絵の技術が開発され、浮

世絵師の集団が新しい前衛的な作品を発表し、狂歌が生まれ、漢詩や狂詩のグループである詩社が登場する。こうして、江戸文化を発達させていくんですね。

江戸の中の芝居町では、その町の中に家族がいて家がある入れ子構造が見えてきます。いくつもの劇場が集められた芝居町では、劇場だけでなく、芝居茶屋が、劇場の切符を売ったり客に宣伝をしたり、客のために料理やお酒を注文したりする機能を担っていました。さらに、年中行事やメディア戦略を行なうプロデュース集団もありました。そのような芝居町の地図を見ると、脇道には風呂屋や料理屋などのほか、作家や役者の名前も見え、家があったことがわかります。つまり、ひとつの町の中に芝居関係者の集まる町があり、そこには芝居関係者の家があり、企業体として仕事をする家族の営みがあるという情景が見えてきます。そして、このような地域に芝居関係者と一緒に住んでいる人たちは、芝居の季節になると、客の呼び込みに協力したり、一緒にお祭りをするなどして、盛り上げていく。そうしてコミュニティを成り立たせていたんです。

■「連」が教えてくれる、新しい家族の可能性

江戸時代の家や連、コミュニティについて話をしてきましたが、家族を考えるときに家族の中のことだけを考えていると、なぜ「家族」というのかが、わからないんですね。まさにしがらみとしての家族というものを、ずっとその形で守っていかなければいけないのか、それは大事なものなのだろうか。もちろん大事なんですが、大事なのは「関係」なんですね。そこで連が教えてくれるのは、人が協力しながら何かを生み出し、新しい社会をつくっていくということです。その協力関係の中にこそ、わたしたちは自由を見出してきたということなんです。ですから、これからの家族は血縁じゃなくてもいいかもしれません。高齢者、特に女性の高齢者は夫に先立たれて一人になる可能性が非常に高いのですが、そのような人が、家族だからという理由で、子どもたちとだけで生きていかなければならないのか。あるいは一人だけで、あるいは施設に入って生きていかなければならないのか。そのような、いくつかの選択肢しかないのか。

でも実は、血のつながりのない人たちがひとつの空間でコミュニティをつくる、誰かと協力関係を結びながら新しい家族をつくるということも、ありうるわけです。そのことを現実的に教えてくれるものとして、最近は、セクシャル・マイノリティの一部の人々を指すLGBTという言葉があります。LGBTは、人類発生以来ずっとありました。江戸時代にもあります。江戸時代は特にゲイにとっては非常に自由な時代だったので、恋愛関係の男性どうしが一緒に暮らしても、白い目で見られることはありませんでしたし、物語にもよく登場します。

日本はLGBT先進国だったのに、今は遅れていて、ヨーロッパではどんどん同性の結婚制度ができています。それは、人類の普通のあり方に従ったものです。男女が一緒でなくても、同性どうしで一緒に暮らし、血のつながらない子どもを育てるような家族があってもいいわけです。日本では少子化が叫ばれていますが、別に日本人の子どもではなく、ほかの国の子どもを育ててもいいんです。そういうことは、実は世界では起こっているのですが、日本ではあまり起こりません。ほかの民族、日本民族以外を受け入れたくないというのが、どこかにあるのかもしれません。でも、そういうことからすら、わたしたちは自らを解放することができる。それが、連という可能性です。

連というのは、自分のもつさまざまな能力を外に出して、人と一緒に協力し合いながら別のものを作っていく力です。その力で、新しい家族をつくることもできるはずです。そういう新しい家族が、これからの社会を豊かにしていきます。新しい家族のあり方をこれからのわたしたちが発見できるかと思うと、わたしはすごく自由な気持ちになります。少子高齢化の日本だからこそ、新しい家族のあり方がいろいろなところに出てきて、二つとして同じ家族はいないという連的コミュニティをつくっていく。そうやって助け合っていくことも考えたいと思いながら、わたしの講演を終わりにします。ありがとうございました。

※わかりやすくするため、引用文献については旧仮名遣いを現代仮名遣いで表記している箇所があります。
※紙面の都合上、講演資料の一部しか掲載できませんことをご了承ください。

田中 優子（法政大学総長・江戸文化研究者）
1952年、神奈川県に生まれる。法政大学文学部卒。同大大学院人文科学研究科修士課程修了後、同大大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学。2014年4月より法政大学総長に就任。専攻は江戸時代の文学・生活文化、アジア比較文化。行政改革審議会委員、国土交通省審議会委員、文部科学省学術審議会委員を歴任。日本私立大学連盟常務理事、大学基準協会理事、サントリー芸術財団理事など、学外活動も多く、TV・ラジオなどの出演も多数。

パネルトーク

田中 優子×橋谷 能理子×原島 博（コーディネーター）

■「連」にはいいヒントがたくさん詰まっている

原島　田中先生、どうもありがとうございました。江戸時代の話でしたが、なんだか、未来の話のように思いながらお聴きしました。ここからはパネルトークということなので、橋谷能理子さんに来ていただいております。今日は会場から質問を受ける時間が取れませんので、橋谷さんにはキャスターとしてではなく一人の女性として、会場の方はこんなことを考えているのではということをおっしゃっていただければと思います。橋谷さんはキャスター、主婦、そして一児の母ですね。一児といっても、お子さんは大学生とか。

橋谷　もう大学生で大きくなってしまいました。

原島　過去２回のシンポジウムは男性二人と女性一人でしたので安心だったのですが、今日は、女性二人に男性一人。だいたい家族の話をすると男性が悪いという話で終わりがちなので、今日はもう少し広い立場で議論をお願いできればと思います。まずは橋谷さん、今の田中優子先生のお話をお聴きして感じたことをお話しいただければと思います。

橋谷　はい、お話を伺いながら、激しく何度もうなずいてしまいました。先生がおっしゃっていた江戸時代の血縁ではないコミュニティが、どんどん血縁の核家族という小さなかたまりになっていって、その弊害が極限に来ているような気がするんですね。たとえば育児に関して言うと、ワンオペ育児という、お母さんがとにかく一人で全部背負って、自分のキャリアも投げ出して、保育園に入れなかったら悩んで、職場にも戻れない。そういう例をたくさん見てきているので、もう血縁だけの核家族でなんとかなる時代ではないと、すごく感じています。では何がそれに取って代わるのかといったとき、なるほどと激しくうなずいたのが、連という血縁ではないコミュニティ。これをぜひ現実化していってもらいたいと思いながら聴いていました。すごくいいヒントがたくさん詰まっている気がします。

原島　実は第２回の山極先生のときも、まさに同じ話でした。今日、最初に少しお話ししましたが、人類はまさに連をつくってきた。直立二足歩行を始めたときから子育てもみんなで一緒に行ない、一緒に生き延びてきたというお話だったのですが、それが少なくとも江戸時代までは続いていたということなんですよね。

田中　そうですね。たとえば商家には、お手伝いさんや子守さんのような他人がいっぱいいます。すると、その家で子育てが行なわれている場合、お母さんだけではなく、いろいろな人が子どもの面倒を見られるんですね。農家も当然同じで、近所の方がいますよね。長屋は、もっとそうです。わたしは長屋の出身なのでよくわかるのですが、小さい頃に祖母や両親が留守のときにおなかをすかせたら、隣に行くだけです。すると隣のおばさんが「おなかすいてるのね。じゃ、一緒にごはん食べようね」って。そこでわたしがお茶碗を割ったりすると、おばさんがお母さんみたいにちゃんと叱る。そういうことが、ごく普通にありました。そのような近所も含めて、家族ではない関係の中で子育てができた環境が、橋谷さんのおっしゃるように本当になくなってしまって、今は子育てがとてもつらく大変なものになっていると思います。

原島　子育ての基本単位として家族があるのはわかるけれど、昔は家族以外に子育ての仕組みがたくさんあったんですよね。ぼくの小さいときは母親にくっついていると、「おこづかいをあげるから外で遊んでおいで」と言われました。今、外は危ないので、そんなことは言えません。昔は外、つまり地域の中に子育ての仕組みがあったから、自分は忙しいので地域の子育ての場に行きなさいと、親が言えたのですよね。

■大事なのは“中途半端”な関わり方

田中　家の構造で考えると、昔の家はドアではなく、引き戸ですね。引き戸がおもしろいのは、全開もあり、すべて閉める場合もあり、途中まで開いている場合もあること。長屋はだいたいクーラーがないので、夏は全開です。すると、すぐ近所の人が入ってきて、上がり口に座るんです。ちょうど椅子の高さと同じような床の高さですから。今は床が低くなっているから、家の中に上がり込むか、玄関で立って話すしかないのですが、江戸時代からついこのあいだまで、近所の人が土間の上がり口に座って家の中の人と話をするという関係がありました。子どもと近所の人がいつもどこかで接触しているので、まさに安

全な顔なじみの関係ができます。

原島　それがドアになって、中途半端に開いていると危なくて、かつ外から見られるのは嫌だということになるんですね。実は外から見られないようにするのは、セキュリティ上、きわめて危険なんです。塀を作っているようなものですから。泥棒からすれば塀を乗り越えるときは危ないけれど、乗り越えてしまえば、通りから見られなくなるので安全なんですね。

橋谷　わたしの田舎のおばあちゃんの家は農家だったのですが、鍵をかけないので、普通に知らない人が家に入ってきていました。それでも危ないことはなかったので、そのほうが安全だというのはわかるような気がします。

原島　それに縁側もありました。縁側は靴や草履を脱がなくてもよかったんですよね。

田中　そうなんです。“腰掛けて関わる”という中途半端な関わりが、すごく大事です。今は密接になるか疎遠になるかしかなく、それが問題だと思うんです。橋谷さんのおばあちゃんの家は開かれていたけれど、ご自身の家はどうでしたか？

橋谷　実家には両親だけが住んでいて、家にいるときは鍵は開けっ放しで、近所のおばちゃんが普通に「こんにちは」と入ってきます。わたしは実家に帰省すると、「危ないから鍵をかけないとだめじゃない」と鍵をかけるのですけど、両親は「大丈夫よ」って。わたしの場合は高校生ぐらいから鍵はかけるもの、ドアは閉じるもの、という意識になってきたような気がします。

原島　ぼくも小さいときは、当たり前のように隣の家に入り浸っていました。今はマンションだと、表札もつけない家も増えていますよね。それはとても危ないと思うのですが、東日本大震災のときに、見直そうという動きがありました。互いに隣の家を知っていると、いざというとき、「あそこに一人暮らしのおばあちゃんがいたぞ、ちゃんと避難したか、ちょっと行ってみよう」ということが可能です。震災の数カ月前にあるマンションで芋煮会が開かれ、そこでみんなが知り合いになれたために、いざというとき非常に役立ったというニュースもありました。

橋谷　ちょうどその頃、うちのマンションで、何かあったときに住民の安否を確かめられるよう、緊急連絡先の載った全戸の名簿と、“無事ですステッカー”というのを作ったんです。「うちは無事ですよ」とドアの外に貼るステッカーですね。でもやっぱり何戸かからは、名簿に名前や連絡先を載せることに、猛烈な反発がありました。結局、説得してもどうしても嫌だという家は載せなかったのですが、そういう試みには、必ず反発があるんですよね。ただやっぱりやっていかないと、いざというときに絶対に困ると思うんです。難しいところなんですけどね。

原島　反対する自由もありますからね。みんなで同じようにしなければいけないとなると、しがらみに感じる人もいるだろうし。ところで今日は家族の話ですが、家族の中で重要なのはやっぱり子育てですね。子育ての仕組みがしっかりできていれば、家族は、ある意味で自由になる。今はすべて家族に集中させているから、かえって家族を狭く、「こうでなければいけない」と感じているような気がします。

■これからの時代を生き抜くにはたくさんの顔が必要

橋谷　息子が小さい頃、家のそばに住んでいるベビーシッターさんにお世話になっていたんです。仕事でわたしの帰りが遅いときは保育園に迎えに行ってくれて、シッターさんの家で面倒を見てもらっていました。それで息子が３歳になった頃、気がついたらわたしの知らないうちに、おむつが取れていたんです。驚いたら、シッターさんが「○○ちゃん、ちゃんとトイレができるようになりましたよ」って。ですからわたしは、一度もトイレトレーニングをやっていないんです。今それを考えると、すごくいいコミュニティができていたんだと思います。お母さんがトイレトレーニングをしないのに、おむつが取れるというのは、普通はないですよね。本当にいいシッターさんに巡り合えたと思うんですが、このようなことがいろいろなところであると、すごくいい世の中になると思います。

田中　それが今は、保育園でということになってしまう。もちろん保育園は必要ですが、すべて保育園まかせというのは、とても不自然な気がしますね。

原島　その間がたくさんあるはずなのに。

田中　そう、もっといろいろあってもいいはずでしょう。ベビーシッターさんとのコミュニティでもいいし、先ほど話したように、家の中に知らない人がいてもいいかもしれない。これは「個人」の考え方と関係があるかもしれませんが、個人情報を外に漏らしてはいけない、守りきらなければいけないという圧力が、組織の中ではとても強いんです。犯罪被害から組織や個人を守るためには確かに必要ですが、個人とは何なのかを考えると、“どんな情報も出してはいけない「わたし」”ということに、とても疑問を感じます。講演でも話しましたが、一人の個人の中にはたくさんの「わたし」があって、その「わたし」がいろいろな触手を外に向けて、いろいろな人と関わりをもつことをちゃんと認めなければいけない。柔軟な個人像はもったほうがいいと思います。それをもったとしても、たとえば排斥主義的なことにはならない。外国人に対する排斥主義にはヘイトスピーチなどがあ

りますが、不思議に思うんです。多様な友だちがいたら、こうはならないだろうと。つまり、同じ価値観の人としか友人になれない閉じた人たちなのです。自分の一部分でも異なる背景のある人と何らかの関わりをどこかにもつことで、理解や、先ほど原島先生がおっしゃった共感が生まれるわけですよね。すると、人間と人間との共感として感じられるようになるから、国籍や民族は排斥する理由にはならない。今はグローバル化が叫ばれているけれども、グローバル化でとても大事なことは、グローバルに友だちをつくることだと、学生たちにも言っているんです。

原島　個人は英語で individual です。in は否定ですから、individual は、「分けられない」という意味ですが、もともと人間は individual ではなく dividual ではないかと思います。作家の平野啓一郎君が、個人に対して「分人」という言い方をしています。一人の人の中に、分けられるいろんな顔があると。ぼくは「顔学」についても少し勉強していますが、自分にひとつの顔しかないと、その顔がだめになったらお手上げです。今、高齢者になっている団塊世代の男性の中には、会社の顔しかもっていない方が多くて、定年を迎えてもう生きていけないとか、自分は何だろうと思ってしまう人が多い。たくさん顔をもっていれば、定年後はこの顔でいこうということができる。これからの時代を生きていくためにはたくさんの顔をもつことが重要だと思いますが、まさに江戸時代がそうだったのですね。

田中　そういえば、橋谷さんはたくさん顔をもっていますね。わたし、『サンデーモーニング』でご一緒していたときには、橋谷さんは『サンデーモーニング』の顔しかないのかなと思っていたのですが、大学や日本語学校でも教えていらして、お子さんもいらして、いろいろな顔をもっていると思います。

橋谷　そう言われればそうですね。たとえば友だちも、仕事関係と、ママ友と、わたしは学生時代にバンドをやっていたので、バンド仲間のグループがあるので、仕事で落ち込んだときはママ友やバンド仲間と飲んでわいわい騒ぐとか、違う自分のところに行くとホッとすることはあります。だから先ほどの江戸時代の、一人がいろいろな名前をもつというのは、とてもいいと思います。ただ、今は SNS でアカウントを一人でたくさんもっている人がいて、アカウントごとに暗い自分、明るい自分などの使い分けをしていますね。江戸時代の一人の人がたくさん名前をもっているのと、SNS のアカウントをたくさんもっているのとは、同じようで違っていて、どう考えたらいいのでしょうか。

田中　SNS のアカウントをたくさんもっていても、まわりの人は、全部のアカウントが一人のものだということを知りませんよね。江戸時代の場合は知っているんですよ。

原島　あ、それはけっこう重要ですね。匿名ではないわけですよね。

田中　匿名ではないんです。江戸時代の研究をしている者からすると、一人の人に名前がたくさんあると、同一人物なのかどうかを文献上で判断するのに苦労するのですが、当時はみんな知っていたんです。それがとても大事。お互いにそれを許しているというのかな。

橋谷　なんだか、江戸時代というのはすごく自由な感じがします。

田中　でもこのあいだ、橋谷さんが二胡をもっていらしてね。二胡って、中国の楽器なんですが。バンドをやるだけではなくて、その演奏もしていらっしゃる。

橋谷　演奏なんて……。まだ練習中で、ギコギコです。

田中　でも、やっぱり橋谷さんのように、女性のほうがいろいろな自分をもちやすいという柔軟性はあるのではないかと思うんですよね。

原島　実は 20 年以上前、ぼくは育児研究会に属していました。ぼくは全然育児をしなかったのですが、発表の場では、育児から母親を解放するにはどうしたらいいか、それが育児の本質ではないかという話をしたんです。育児から解放する仕組みをつくっておくと、つまり母親としての顔だけではなく、別の顔をもっていれば、逆に育児をしたいという気になるのではないかと。「あなたは育児をするのが役割です」とまわりから言われてしまうと、育児が苦痛になってきますよね。だから母親がいろいろな顔をもつのは、子育てという観点からも必要だと思います。もちろん最近は、育児に関しては「父親も」と言わなければいけないのですが。

田中　12 月に法政大学で「アバター for ダイバーシティ」という題名でシンポジウムを行ないます。別の人間を自分の中に発見するということを現代の現象から、精神医学の面も含めて考えてみるつもりなんです。たとえば自閉症の方々が、社会的役割が決まっている人間関係の中ではうまくいかないのに、アバターを使ったとたんにすごく生き生きとして、いろいろな能力を発揮するという研究があるんですね。そういう研究をアメリカで行なっている池上英子さんと一緒にシンポジウムを行なうのですが、実際に、そういうことはあると思います。社会的な役割は大事ですが、その中に閉じ込められていていいのか。人間はいろいろな能力をもっているから、社会が変わっていくときにこそ、今の役割だけではない自分の能力を別の方向から発揮してみるというのは、社会のためにもなるはずなんですよ。それを、もうそろそろ考えなければいけないと思います。

■家族を、生きていくためのコミュニティと考える

原島　ちょっと別の話をしますが、今日の話でもうひとつおもしろかったのは、昔は家族

がひとつの企業体であったということです。でも今は大きく変わってきて、外に働きに出る父親や母親が多い。すると、子どもには親が働いているところが見えず、これは大きな問題だと思っています。子どもは大人を見て育たないといけないのに、今は分離してしまっていて、子どもは働く親のかっこいい姿ではなく、仕事に疲れて帰ってきた見苦しい姿を見ているわけですよね。ぼくは情報が専門ですが、情報化社会では、働いている姿が見えるような子育てが可能になっていくかもしれません。パソコンに向かって仕事をするだけなら、家でもできるはずですからね。あるいは、出社する日を月・水・金曜にして、それ以外の日は家で仕事をしてもいいようにするとか。月・水・金組と火・木・土組に分かれて出社すれば、通勤ラッシュも半分になるし。そうした働き方が、これから重要になると思っています。

田中　職住が離れてしまったことが江戸時代と近代を分ける、大事な区切り目なんです。たとえば江戸時代の女性たちが誇りをもっていた仕事のひとつが、機織りです。機織りは家の中で行なっていましたが、工場生産が始まってからは工場に集約されました。野麦峠の話のように、工場に集められた女性たちは長時間労働です。ラインがあるので人を集め、効率的に働かせていたわけですが、原島先生もおっしゃるように、本当はいろいろな場所で働ける今でも、同じ働き方をしています。これが、働き方改革がうまくいかないひとつの理由です。

　それから、農業や漁業、林業などがなくなってきたのも、大きな理由ですね。これらはどんな時代であろうと、家と仕事が一体化していないとできないので、家族が一緒に働くことになりますが、それもなくなってきています。そういう社会の中で、新しい職住近接型とか職住一致型の働き方というのが生み出せたら、家族は変わります。家族は家族の問題としてだけで考えるのではなくて、働き方や社会の問題と一緒に考えなければいけない気がします。

原島　家族がおじいさんやおばあさんと離れてしまったことも大きいですね。これは前回の山極先生の分野の話ですが、ホモ・サピエンスからお年寄りが生き残るようになったのです。ほとんどの動物は、生殖ができなくなったら死んでいく。ところがホモ・サピエンスは違って、おばあさんは早く閉経をして自分が産めなくなる代わりに若い人を助けるという戦略を立て、それが大成功を収めました。おじいさんも村の長老のように、文化を伝承するという役割を担った。ところが今のおじいさんやおばあさんは助けられる側に回ってしまって、助ける側という意識が薄くなってきた。非常にもったいない気がします。

橋谷　最近よく聞くのが、幼児の「幼」と老人の「老」を合わせた「幼老院」という言葉です。血縁関係のないおじいちゃんやおばあちゃんが子どもたちを育てて、逆に子どもたちから元気をもらう。そうした施設がうまくいっているというニュースを、時々見かけます。

原島　幼稚園の「幼」と老人ホームの「老」を一緒にするわけですね。

橋谷　それは、先ほどから優子先生がおっしゃっている、血縁じゃないコミュニティのうまくいっている例だと思います。おばあちゃんやおじいちゃんは、やっぱりものすごく知恵もあるし、今のお年寄りは元気だし、介護される側や、いたわられる側ではない活躍の仕方が絶対あるはずです。それをうまく生かしてコミュニティをつくれば現代版の連ができるのではないかと思って、少し希望が見えたような気がします。

原島　幼稚園の隣に老人介護施設があると、いいんですよ。実は子どもにとっていちばんいいのは、人間は死ぬものだと教える教育です。死を身近に感じ、悲しみを乗り越えていくことで、子どもは成長していきます。今はそういう機会がなくなっていますね。

田中　おじいちゃんやおばあちゃんから自分を引き離して東京に出てこないと仕事ができなくなったということも、大きな問題ですね。この問題は、まだまだ続くと思います。わたしは、地方から出てきて東京の大学で育った学生には、本当は地方に戻ってほしいんです。U ターンすれば、両親と一緒に暮らし、そこで結婚して子どもを産むという循環ができます。ですから、U ターンを希望する学生たちの力になってあげてほしいということを、いろいろな場所で話します。すると、卒業生たちも最初は意欲を見せてくれるんですが、現実には地方には働く場所がないという話になってしまう。これも課題ですね。

原島　過疎化や限界集落という厳しい状況がある地方でこそ、都会にはないコミュニティをつくることで魅力を高めていくことができるかもしれませんね。連のようなものをつくるにしても、都会では、隣の家を説得するだけで疲れてしまうような部分もありますし。

橋谷　先ほど優子先生がおっしゃった LGBT の家族、必ずしも男性と女性が結婚して子どもを産んで家庭をつくらなくてもいいというお話が、とても印象に残りました。そうなったら、世の中はとても自由になると。同時に思い出したのですが、『万引き家族』という映画はご覧になりましたか？　複雑な家族関係と絆を描いた物語でしたが、あのような絆もありなのかなと思いました。

原島　家族を小さく考えてしまうと子どもをつくることだけが目的になってしまって、それが義務になる。そうではなくてもっと広く自由に考えるようになれば、逆に子どもをつくりたいと思うようになると思うし、子育ての新しい仕組みが出てくるという気がします。

田中　子どもを産まない理由のひとつが、教育費の高さです。OECD 諸国の中で、日本は国家予算を教育費にあてる率がとても低いので、確かに教育費は高くて大変なんですが。でも家族が多くて働いている人が多ければ、一人の子どもの教育費を分担して負担できるかもしれません。LGBT じゃなくても、つまり、同性どうしで性的関係がなくても、恋愛関係じゃなくてもよくて、いろいろな関係が可能です。家族どうしでも気の合わない人がいるように、他人どうしなら、なおさら気が合わない人もいるかもしれないけれど、江戸時代のように企業体、生きていくために必要なコミュニティだと考えれば、自分と同じような考え方をもっていなくてもいいと思うんです。

原島　お時間が残念ながらあと 1 分になりました。橋谷さん、最後におっしゃりたいことを。

橋谷　先日新聞で読んだのですが、歳を取って不安になった独身女性が、同じような境遇の人たちでグループをつくって一緒にお墓を買いに行ったり、ひとつの屋根の下で暮らすという形も出てきているようなんです。枠を取り払うと、世の中がどんどんよくなるような気がして、今日はなんだかすごく明るい気分になりました。

原島　ありがとうございます。今日は、まとめるつもりはありません。これはみんなで一緒に考えていこうということで、終わりにしたいと思っております。本日は本当にありがとうございました。

パネリスト

橋谷 能理子（フリーキャスター・コミュニケーション講師・日本語講師）

1961 年、香川県に生まれる。東京女子大学文理学部卒。テレビ静岡でアナウンサーをした後、フリーに。テレビ朝日『ニュースステーション』でアシスタントキャスターを務め、テレビ、ラジオの報道、情報番組などで活躍する。キャスター、主婦、そして 1 児の母としての、多角的な視点と感性から生まれる意見には定評がある。現在は TBS『サンデーモーニング』に出演中。「日本語」を使う仕事の経験を生かし、外国人留学校で日本語講師としての活動も行なったり、コミュニケーション講師として東京女子大学非常勤講師、立教大学兼任講師としても教鞭を執る。

（撮影：中村 年孝）

コーディネーター

原島 博（東京大学名誉教授）

1945 年終戦の年に東京で生まれる。2009 年 3 月に東京大学を定年退職。東京大学では、工学部および大学院情報学環に属して、人と人の間のコミュニケーションを、リアルとバーチャルの両側面から技術的にサポートすることに関心をもってきた。その一つとして、人の顔にも興味をもち、1995 年に「日本顔学会」を発起人代表として設立、「顔学」の構築と体系化に尽力してきた。科学と文化・芸術の融合にも関心をもち、文化庁メディア芸術祭審査委員長・アート部門審査員、グッドデザイン賞（G マーク）審査員などもつとめた。現在は東京大学名誉教授、2015 年 12 月より再び特任教授として東京大学に戻り、全学共通の文系・理系を横断した大学院教養講義を担当している。公益財団法人花王芸術・科学財団　評議員。

公開シンポジウム
「これからの家族を考える」シリーズ第 3 回

発行　公益財団法人 花王芸術・科学財団
〒103-8210　東京都中央区日本橋茅場町 1-14-10（花王ビル内）
Tel：03-3660-7055　Fax：03-3660-7994
編集　公益財団法人 花王芸術・科学財団　事務局
発行日　2019 年 2 月 1 日